

# 邂逅

熊岡まもる



Graphic : ONAKA



葛城涼かつぎりょうがクラスメイトの水島由紀みずしまゆきの姿を見かけたのは、札幌の地下鉄大通駅おほとろぎの改札を出た所だった。

涼は、駅に直結した書店に行こうとしていた。不意に視界の隅に、見たことのある女の子が映った。

由紀は、涼に気づいた様子はなく、改札を出てまっすぐ地下街ポールタウンの方へ歩いていく。

涼は、不意に後をつけてみたいという衝動に駆られた。書店に行くのを中止して、歩く方向を変え、由紀を尾行し始めた。

ポールタウンの中に入る。

地下街は、はなやいだ雰囲気につつまれている。流れている音楽に合わせて、皆、ダンスをしているかのような印象を与えた。

今日は日曜日だった。

涼は気分転換に街へ出てきたのだった。

由紀もそんな理由からだろうか？

由紀はふだんのイメージとはずいぶん違う服装だった。

白い半袖のTシャツにオレンジがかった黄色のミニのチュニック、茶のハーフブーツ。そして、肩から青いシヨルダーバッグを提げていた。

チュニックのあざやかな色が、一瞬別人かと思わせたが、よく見ると由紀だった。シヨートカットの黒い髪。大きな瞳。

由紀は、ふだん学校では、どちらかと言えば目立たない生徒だった。スカート丈こそ短かったが、両膝がやっつと出る程度だった。しかし、今は、チュニックの裾から大胆に太腿を露出していた。生脚なまむちだった。

後をつけているうちに、涼は、由紀が学校で見かけているよりもスタイルがいいと感じた。今まで気づいていなかっただけなのかもしれない。

デートにでも行くんだろうか？

尾行しながら、そんなことをぼんやりと考えた。

別に話しかけるつもりもなく、ただ単に後をつけているだけなのだが、涼が、由紀に興味を持ったのにはわけがあった。

あれは、半年くらい前のことだっただろうか。担任から、そろそろ受験の準備に本腰を入れるようにと説教された日だった。不愉快な気分、ホームルームを終えて、教室を出た涼は、自分の机に忘れ物をしたことに気づいた。いったん出た教室の扉の前で思い出し、方向転換して再び教室に入ろうとしたそのときだった。急に扉が開き、中から水島由紀が出てきた。避ける間はなかった。涼と由紀は正面からぶつかった。

「あつ。ごめん」

涼はかろうじて立ち止まったが、由紀はよろけて持っていた

手提げ袋を取り落とした。中身が床に散らばった。

「ごめん。ごめんよ」

涼はしゃがみこんで、手提げ袋の中身を拾い集めた。小型のスケッチブック、筆入れ、そして、書店のカバーのかかった文庫本。文庫本は表紙が開いた形で背表紙を上に着ていた。涼が文庫本を拾い、閉じて渡そうとしたその一瞬、中表紙が見えた。

『ジュスチーヌまたは美德の不幸』

聞いた事のない本だったが、なぜかその書名は記憶に残った。

「どうもありがとう」

由紀は蚊の鳴くような声で礼を言った。

「怪我はない？」

「大丈夫よ。何でもないわ。じゃ、さよなら」

それだけ言うと、由紀は逃げるように廊下に出て行った。

その本の著者が、サドという人物だと知ったのは後のことだった。

サドとは、マルキ・ド・サドのことだった。

翌日の放課後、図書館で調べた。

由紀の持っていた『ジュスチーヌ』はサドの代表作だった。

サドはフランス革命期の人物で、監獄に閉じ込められていた人物だった。監獄に幽閉されるほど、サドの書くものは反社会的だと判断されていたらしかった。

サディズムの創始者と書いてある本もあった。さらに、サディズムを調べると、異性を傷つけることで快感を得る性愛一般をサディズムと言い、傷つけられることで快感を得る性愛をマゾヒズムと言う。

サディズムとマゾヒズム……。

いわゆるSMというやつなんだろう。

あの、おとなしそうな由紀が、そんなことに興味があるのだろうか？

涼は、日頃、何気なく見過ごしている由紀の一挙手一投足が気になりだした。

涼自身は、SMには興味はなかった。

そんなことをして、気持ちよく感じる人もいるのだろうか。

それくらいしか考えたことはなかった。

そのことがあって以来、涼は由紀を見つめていた。由紀は、

それまでと変わることなく、クラスで目立たなくすごしていた。

涼は、由紀が教室で本を読んでいるのを見たことがなかった。

あの『ジュスチーヌ』という本を教室でひろげてはいなかった。

どこで読んでるんだろう？

ふと、そんなことが頭にひっかかった。

由紀は、学校まで地下鉄とバスで通っているようだった。

その中で、こっそり読んでいるのかもしれない。

そう思ったとき、涼は、自分が由紀に対して単なる興味以上

のものを感じていることに気づいた。

しかし、だからと言って、あらためて由紀に話しかけるようなことはなかった。

ただ、涼は折に触れ、由紀を見つめていた。もちろん、視線を感じられてしまうほど、しつこく見つめてはいなかったが。

それ以来、涼は由紀のことを気にかけていたのだった。

ポールタウンを歩く由紀は、地下街の一つの店で足を止めた。

それは、女性の下着の専門店だった。

セール中らしく、店頭にワゴンが置かれ値引きした商品が乱雑に置かれていた。

由紀は、そのワゴンに向かって商品物を色し始めた。ワゴンに置かれているのは女性用のショーツのようだった。

涼は一瞬、困ったが、その店の向かい側の並びにある靴屋の店に向かって、熱心に靴を見ているふりをした。

そうして、由紀の方を観察した。

由紀は、そんな涼に気づくようすもなく、下着を手にとつて品定めしている。

思い立って買い物しようとしているのか？

しばらくすると、由紀はショーツらしきものを手に取って、店の中に入つて行った。出てきたときには、店の紙袋を手にして、中に入れようとしているところだった。

もしかして、誰かに穿いて見せるためかもしれない……。

そんな直感が、涼の脳裏にひらめいた。

由紀はこれから、デートなのかもしれない。

セックスするのだろうか……。

ごくりと、唾を飲み込む。

気がつくのと、勃起していた。

自分は、由紀に対して好意を寄せているのだろうか？

単に、興味の対象というだけではないのだろうか？

由紀を性欲の対象として見ているだけなのだろうか？

自分でも判断がつかなかった。

由紀は再び歩き出した。

やはりポールタウンを、地下鉄すすきの駅の方へ向かつて歩いていく。

涼はふたたび尾行を始めた。

さつきまでは、気がつかなかったが、由紀は表情も明るく、

こころなしかうれしそうだった。足取りも軽いようすで、どんどん進んでいく。

デートだろうな。

でも、相手は誰だろうか？

涼は思った。

どちらかといえば、友だちも少ない由紀に彼氏がいるということ自体、考えにくいことだった。

同じ学校の生徒だったら、こんな街の真ん中で会うというのもおかしいと言えばおかしかった。

涼は、徐々に自分が焦っていくのを感じていた。

おれは、水島由紀には興味はなかったはずだ。

いや、そうではない。

興味はあった。

だが、それは、男として女の由紀に興味があったわけではない。サドの著作を読んでいる女の子として、奇異に見ていただけだ。

それは、やはり、女として見ていたということだろうか？  
そして、今、胸をよぎるこの思いは、嫉妬なのだろうか？

涼は、自分の足元がゆらゆらと揺れていくのを感じた。

由紀はポールタウンを進み、地下鉄すすきの駅に近づいた。

どこまで行くんだろう？

涼は現実に戻った。

由紀はポールタウンを出て、すすきの駅に入った。

時刻は午後二時を回ったところだった。

すすきの駅の構内には人が多かった。

地下鉄に乗りとうと切符を買う人。待ち合わせのために立っている人。ただ急いで歩く人。そんな人ごみの中を、由紀は上手

にぬように歩いていていた。

涼は、由紀を見失わないように歩いて歩くのに必死だった。

由紀は、すすきの駅に直結したデパートの連絡口のそばにある地上への階段を上った。涼はややしばらく待ってから、自分も上り始めた。

階段の上のほうに、由紀の姿が見えた。チュニックからのびた両脚が、なまめかしかかった。

由紀はずんずん上り、地上に出た。

外は陽はさしていたが、薄曇りがかかっていた。

由紀は地上に出てから右に曲がり、すすきのの奥の方、つまり地下鉄中島公園駅なかしまの方へ向かって歩き出した。

この辺はすすきのの繁華街である。

涼はふだん足を踏み入れたことのない街を歩くので、少し臆した。しかし、由紀は平気でずんずん歩いて行く。

すすきのに慣れているかのような印象を受けた。

信号を待ち、横断歩道を渡り、まっすぐ中島公園に向かつて歩いて行く。

どこまで行くんだろう？

大通駅からここまで、地下鉄一駅分以上歩き通しだった。

右手に豊川稲荷という神社を見ながら、さらに信号を渡る。

そして、三階建てほどの立体駐車場のわきに小道があった。

この小道にさしかかったとき、由紀は不意に足を止めた。涼も立ち止まり、すぐそばの菓屋のショーウィンドーを覗き込んで

でいるふりをした。

そのときはじめて、由紀はあたりを見回した。周りに知った顔がないことを確かめているようだった。

確認を済ませると、由紀は立体駐車場の角を右に曲がった。

目的地が近いのだろうか？

涼は、ゆっくりと由紀の曲がった角に近づいた。

角に立って、由紀が歩いて行った方を見る。

由紀の後姿が見えた。

あたりのようすを見て、合点が行った。

由紀の歩いている通りの両側には、ラブホ——つまりラブホテルが軒を連ねていた。

このあたりは、すすきのラブホテル街のようだった。

やっぱり、男と会うのか……。

涼は思わず息を飲んだ。

ここまでつけてきたのだから、どのホテルに入るのか見届け

てやろう。

そう思い、歩き出した。

由紀との間にはかなり距離があった。

由紀はさらに歩き、十字路をまっすぐ通り過ぎた。右手に青

空の駐車場があり、その奥に灰色のコンクリートの壁のラブホ

テルがあった。ラブホテル自体にも地下駐車場を持っているよ

うで、自動ドアの出入り口の横に地下駐車場への出入り口があ

った。

『ホテル・ベータ・イン』

看板にそう書いてあった。

由紀はそのホテルの看板の前で立ち止まり、また左右を見た。

涼とは離れていたもので、気づかなかったようすだった。

由紀は、そのホテルの出入り口から入って行った。

やっぱり、そうか……。

涼は、自分の直感が当たったことが、重苦しく感じられた。

まさか、由紀が出て来るまでホテルの前で待っているわけに

も行かなかった。

どうしようかと立ち止まって考えているうちに、一台の車が

涼の背の方から涼を追い越して進んでいった。黒い軽自動車だ

った。

車は、ベータ・インの駐車場へ吸い込まれるように入って行

った。

誰かホテルに入るのだろうか。

ふと、思った。

もしかして、由紀の相手？

いや、いくらなんでもそんなに次々とくるわけがない。

涼は、自分の中で否定した。

そろそろ行くかと思いだったときだった。

さっき、車の入って行った駐車場の出入り口から、一人の男

が出てきた。

涼は、その男に目が釘付けになった。

久米島光治。

涼や由紀の通っている私立成和学園高校の数学の教師だった。久米島は甘いルックスで女の子に人気があった。すらりと長い脚。低い声。落ち着いた物腰で、教え方もうまかった。

駐車場から出てきた久米島は、細いブルージーンズに白地にチェックのシャツ。それに黒っぽいブラウンのジャケット姿だった。このホテルにも慣れているらしく、あたりを見回すこともなくホテルの出入り口に消えた。

由紀の相手は久米島だったのか……。

涼はしばし呆然と立ち尽くした。

生徒が教師と関係を持つことは、今の世の中ならばありえることなのかもしれない。しかし、自分の学校でそれがあつたとは。は。

帰ろう……。

かろうじて、そう思った。

今来た道を引き返しながら、涼は、今日、好奇心からとんでもない秘密を胸に抱え込むことになったと思つた。

もう、最初予定していたように札幌市内の書店めぐりをしようという気は失せていた。

明日、学校で由紀や久米島と今までと同じように接すること

ができるかどうか自信がなかった。

## 2

涼が帰ったとき、家の郵便受けに一通のメール便が入っていた。

宛名は父になっていた。

ダイレクトメールの類ではなく、個人から来たものらしかった。

しかし、差出人の住所は書かれておらず、ただ『城崎文』という名前だけが手書きで書かれていた。

「しろさきふみ」と読むのだろうか？ それとも「きのさき」だろうか？

父の知り合いなのだろう。

しかし、今まで聞いたことのない名前だった。

涼はメール便を手にとると、家の中に入った。

「ただいま」

居間に入って台所に声をかける。

「おかえり。早かったのね」

母が夕食の支度をしながら答えた。

「うん。一生懸命、本を見てたら疲れちゃって」

われながらつまらない言い訳だと思った。

「父さんにメール便、来てたよ」

そう言うと、居間のテーブルの上にメール便を置いた。

「父さん、まだ帰ってないの？」

「もうそろそろ帰ってくると思うわ。日曜日も接待ゴルフに借り出されるんだから、父さんも大変よね」

「……そうだね」

涼には、父の仕事の大変さが、いま一つはつきりわからなかった。接待とはいえ、ゴルフをやりに行っているのだから、自分が楽しむ部分もあるのではないだろうか。接待だからと言って、一概に苦痛だろうと決めつけるのもどうかと思っ

た。涼は、手を洗って口をゆすぐと、自分の部屋で着替えた。

部屋着になってベッドに腰をおろすと、今日、目撃したことが脳裏に浮かんできた。

地下街の店で、下着を選ぶときの由紀の表情。ラブホテルのある角を曲がろうとしたときに見せた緊張した面持ち。いずれも、今まで学校では見ることのなかった表情だった。

そして、久米島……。

やはり、偶然ではないだろうか。

由紀が別の男とデートに来ているホテルに、偶然、久米島も別の女性と会うために来ていた……。

いや、そんなことは考えられない。

それじゃまるで、あのホテルがうちの学校の御用達だ。

由紀と久米島は、何らかの関係を持っていると考えるのが自然だろう。

この秘密を、自分一人の胸にしまっておくことができるだろうか。

涼は胸が潰れる思いというのを実感として感じた。

車が家の車寄せに入ってくる音がした。

窓から外を見ると、父の車が入ってくる場所だった。

涼は部屋を出て、居間に行った。

「ただいま」

父は身体の倍はあるうかという大きなゴルフバッグを抱えて、家に入ってきていた。

「お帰り」

涼は声をかけた。

「ただいま。涼も早かったんだな」

バッグを玄関の下駄箱に立てかけながら父が言った。

「うん。疲れたから帰ってきた」

「そうか……」

父は何か続けて言いたそうなことがあるのではないかと、涼は思った。

何か言いたいことがあるのだが、その言葉を飲み込んでいるのが涼には見て取れた。



勉強のことかな……。

受験も近いわけだし。

休みだからといって、やたらと出歩くのはもうよそう。

そう思った。

「ああ、父さん。メール便が来てるよ」

涼は居間に入ってきた父に、テーブルの上の封筒を指差した。

「わかった」

そう言う父は、洗面所に行った。

手を洗つてうがいをする音がして、戻ってきた。ソファに腰

を下ろすと、メール便の封筒を手を取った。

そして、裏面を返して見たとき、父の表情は凍りついた。

そう、それは凍りついたとしか言えない反応だった。

しわの目立ってきた目元は見開かれ、瞬き一つしなかった。

涼はその反応に少なからず驚いた。

差出人に関係しているのだろうか？

「どうかしたの？」

涼は思わずたずねた。

「いや……何でもない」

そう言うと、父は封筒を小脇に抱えた。

「着替えてくる」

ぼそっと、それだけ言うとう自分の部屋へ行った。

差出人の城崎文というのは女の人ののだろうか？

何かいやな思い出とでも関係しているのだろうか？

父があんな表情を見せたのは初めてだった。

父はいつも落ち着いていた。

涼にとつても、妹の由香ゆかにとつても、いい父親であることは

間違いない。

今どき珍しく、子供に過度に干渉しない親だった。

今は、長かった北央大学の研究所勤めを終え、民間の医療機

器会社で営業の仕事をしていた。移った当座は、慣れぬ畑の仕

事に、大変そうなのは涼にも見て取れた。

しかし、父は研究者にしては社会的な一面も持っており、そ

のせいか段々と営業のコツを掴んでいったようだった。今はい

っぱしの営業職として、酒も飲めばゴルフもした。よくは知ら

ないが、それなりの成績を上げているようだった。

涼は父と同じ研究職の道へ進むことも考えたことがあった。

しかし、父のように打ち込める一つの事が見つからなかった。

一つの事に集中し、その分野で業績を上げるといいうのも、す

ばらしい生き方だとは思うが、何をすべきなのか自分の中で

見つからなかった。今は、いろいろな事に興味があった。

一生の仕事。

それが何になるのか、今からは想像もつかなかった。

「涼。お風呂洗ってちょうだい。今日は、あんだ、当番でしよ

う」

母が台所から顔をのぞかせて言った。

涼は指摘されて、わかっていることだったが少なからず腹が立った。

「今、やるよ」

ぶつきらぼうに答えると、浴室の方へ行った。

風呂掃除は、涼と由香が交代でやっていた。

水の抜いてある浴槽を、シャワーの水で流し、洗剤を吹き付けて三分ほど置く。それから、またまんべんなくシャワーをかける。やってしまえば造作もないことなのだが、やるときにはずいぶん面倒に感じられた。

洗剤を吹き付けて待つ間、涼は、今日来たメール便のことを父に尋ねてみようかと思うた。

でも、あの感じでは、尋ねてもちゃんと答えないだろう。

そう思った。

この件は、父の方から何か言ってくるまで待つことにしよう。もしかすると、自分や妹には知られたくないことなのかもしれない。

涼は、自分の心の中で小さな結論を下した。

風呂の掃除を終え、湯を張り終わると、ダイニングに行った。

妹の由香が自分の部屋から出てきた。

「ああー、お腹すいたー」

妹は涼より二つ年下だった。

涼とは違う高校へ通っていた。

涼は私立高校に通っていたが、妹は北海道立高校だった。そのことが自慢らしく、何かにつけて鼻にかけるところがあった。そのたびに涼は、無性に妹が憎らしくなるのだった。

「お兄ちゃん、早く帰ってきたんだね」

席につくと由香が口を開いた。

「ああ、疲れたんでな」

「受験の準備もあるんだから、あんまり街をほつき歩かない方がいいよね」

涼は心中がむかむかした。

そのとき、父が自分の部屋から出てきて、食卓についた。

父のやはりようすが変だった。

あいかわらず、凍りついたような表情をしていた。

「さあ、食べましょう」

母は夕食を並べ終えた。

今晚は、カレイの煮付けと酔の物だった。

「いただきます」

涼と由香は、食べだした。

しかし、父は箸を手に取りうとしなかった。

「お父さん」

母が声をかける。

そのとき初めて、父はわれに帰ったようすだった。

「あ。なんだい？」

「どうかしたんですか？」

「いや、何でもない」

それだけ言うと食事を始めた。

「涼」

少し食べてから父が読んだ。

「なに？」

「最近、変わったことはないか？」

「変わったことって？」

父が何を聞こうとしているのか、わからなかった。

「見知らぬ人がそばに寄ってくるとか……」

涼はどう答えていいかわからなかった。

「そんなこと……別にないけど……」

「なにそれ。お兄ちゃんがストーカーにつけられるわけないじゃない」

やない」

由香はそう言って笑った。

「……そうか。ないならいいんだ」

それだけ言うと、父は黙々と食べ続けた。

さっき来たメール便と何か関係あるんだろうか？

涼は食べながら考えていた。

### 3

久米島光治は満足していた。

自分に関するほとんどすべてのことが、自分の満足いく状態になっていたからだだった。

人生には何でもうまくいく時がある。そういうときには才能は後からついてくる。

誰かが言っていた。

それが本当たとすれば、まさに今の自分がその時期なのかもしれない。

今の状態を、楽しんでおかなくては……。

そう思って、自宅のマンションを出た。

ふつうのサラリーマンなら、気の重くなる月曜日の出勤だった。

しかし、久米島は足取りも軽くマンションの駐車場に向かった。

今日も水島由紀の顔を見ることができる。

由紀の顔をチラリとでも見るたびに、昨日のデートのことを思い出すだろう。

濃厚で、濃密な、二人きりの逢瀬……。

思い出すたびに笑みがこぼれた。

車を発進させて、学校に向かう。

気分を切り替えなくては。

だが、久米島の喜びの対象は由紀だけではなかった。

もう一人、学校にへ恋人がいた。

一人に集中しすぎないようにしなくては……。

久米島は運転しながら、自分に言い聞かせるのだった。

私立成和学園高校に着いたのは朝の職員会議の十分前だった。

「おはようございます」

久米島は同僚の教師たちに挨拶して席についた。

机の上に、回覧用の書類挟みが置かれていた。種々の雑多な

回覧の書類が留められている。

久米島は、書類挟みを手を取った。

そして、一件一件、書類に目を通していく。最後の書類を読

み終わったあと、最後の一枚をめくって裏を見た。

裏は白紙だったが、書類の下の右隅に18と書かれていた。鉛

筆での走り書きで薄く書かれていた。

何も知らない者が見たら、何かついでのメモくらいにしか見

えなかっただろう。しかし、この走り書きこそ、久米島とへ恋人

との暗号だった。

久米島は思わず、顔がほころぶのを感じた。

18という数字は、今日十八時に待ち合わせの場所に来てくれ  
という暗号だった。

両手に花か。悪くないな。

今日は残業を入れないようにしないと。

久米島は思った。

「では、朝の職員会議を始めます」

教頭の声でわれに帰った。

音楽準備室には夕陽がさし込んでいた。

冴木<sup>さえき</sup>怜子<sup>れいこ</sup>は、二年生の音楽の教案を作る作業の手を止めて、

窓から外を見た。

眼下には、テニスコート。その前の道を下校していく生徒た

ち。

いつもと変わらない風景がそこにはあった。

もし、この学校の生徒たちが、今日、これから怜子が何をす

るか知ったら驚くだろう。

怜子は、成和学園高校の音楽の教師として生徒たちを教えて

いた。指導が厳しい教師として生徒たちからは怖れられていた。

怜子はこの学園の理事、冴木大輔<sup>だいすけ</sup>の一人娘だった。親の七光

りと言われるのが悔しくて人一倍努力してきた。だから、生徒

たちの指導にもつい熱が入った。

生徒たちの指導、学校の雑用、同僚との人間関係。そういつ

たものの一切に、ほとんど疲れてしまうことがあった。  
それだから、ひそかに行っている息抜きだけはやめられなか

った。

久米島光治は、のぞましいパートナーだった。

久米島はどんな秘密もよく守った。

だから、怜子は久米島が自分以外の女と関係を持つことを許していた。

たとえそれが、生徒であっても。

まあ、いいわ。

彼がわたしを満足させてくれるのならそれでいい。他で何をしようとかわまない。

ふと、時計を見る。

午後五時十分。

そろそろ切り上げようか。

でないと待ち合わせに間に合わない。

怜子は机の片づけを始めた。

水島由紀は、今日は掃除当番だった。

他の誰とも口をきかず、黙々と掃除を行った。

「水島さん、先生に終ったって言ってきたくれる？」

女子の一人が命じるように言った。

由紀は黙ってうなずくと、職員室へ行った。

由紀は職員室に行くのが好きだった。

久米島の姿が見られるかもしれないからだ。

一瞬でもいい。久米島の姿が見たい。

そう思った。

職寝室は、大人の雑多な匂いに満ちていた。

担任の机に行く。

「掃除、終わりました」

あいかわらず、蚊の鳴くような声しか出なかった。

こういう場に入ると必要以上に萎縮してしまう自分が、由紀は嫌いだ。

「わかった。今行く」

担任は顔を上げずに答えた。

帰りがけに、由紀は職員室を見回した。

いた。

久米島光治は、パソコンに向かって作業していた。

あたしに気づいてくれないかな……。

由紀はぼんやりと思った。

でも、だめだ。

たとえ、今、久米島が由紀のことに気づいたとしても一瞥もくれないだろう。

学校では、ただの生徒と先生だからな。

久米島はしつこく由紀に言っていた。

自分が正面きって久米島先生の恋人だと名乗りを挙げる日など来ないのだろう。

そのことはわかっていた。

それは、どうなるものでもないということとは。

しかし、それでもいつまで秘密の関係を続けるのだろうか、不安に苛まれることがあった。

卒業したら、恋人として付き合ってもいいのだろうか？

そのことについて、久米島は明確なことを何も言わなかった。

不意に、涙が浮かんできた。

やばい。

ハンカチを取り出すと目頭を押さえる。

先生は、社会人なんだ。

あたしとは立場がちがうんだ。

高校教師が生徒と関係を持ったことが知られたら大変なことになる。

そんなことぐらいは、わかっている。

わかっているんだけど……。

思いは、いつもそこでストップしてしまった。

いいや。

この次のデートを楽しみにしよう。

結論はいつもの通りだった。

ハンカチをポケットにしまうと、由紀は教室に戻った。

## 4

葛城涼がその車に気づいたのは、学校からの帰宅時、家の玄関に入ろうとしたときだった。

家の前の道路。

十メートルほど離れた路上に、赤い軽自動車が停まっていた。

涼は思った。

あの車は、今朝もあそこに停まっていた……。

今までに見たことのない車だった。

運転手は乗っていた。

姿ははっきりとは見えなかった。

何だろう？

張り込み中の刑事？

まさか……。

深く気にせず、家に入った。

それから、その赤い軽は、よく見かけるようになった。

朝、学校へ行くときも同じ場所に停まっていたし、バス停の付近を走っているのを見かけたこともあった。

何なんだろう？

もしかして、父が言っていた見知らぬ人というのと関係があるのだろうか？

家で風呂に入っているとき、そんなことが不意に頭をよぎっ

た。

涼は、あの日以来、水島由紀のことを気にかけていたが、別  
に変わったようすは見られなかった。

由紀のことを気にして、落ち着いて勉強に集中できない日々  
が続いていた。

だから、赤い軽自動車のことも、もっと前から家の周りをう  
ろついていたのかもしれないが、それとは気づかなかっただけ  
なのかもしれない。

父に話してみようか？

そう思ったが、すぐにその思いを打ち消した。

こんなことで、父の心配を増やすには及ばないな。

別に実害があるわけでもないし。

自分の胸に収めておこうと決めた。

そう決めるとかえって気が楽になり、風呂から上った。

その日、涼はいつも通りバスを降りると家へ向かって歩き出  
した。

角を曲がって住宅街へ入ったときだった。

歩いているかたわらに車が停まった。

あの赤い軽だった。

「ちよっと」

歩道側の窓が開いて、声が響いた。

女だった。

涼が立ち止まり、車の方を見ると、サングラスをかけた運転  
手の女が涼の方へ身を乗り出していた。

「葛城涼くんね」

名前を知っている？

涼が黙っていると女はサングラスを取り、につこりと笑った。  
笑みのすきまからも鋭い視線がうかがえた。

「急に呼び止めたりして、ごめんなさい。あなたに少し話があ  
るの。乗らない？」

涼は、その女に妙な胸騒ぎを覚えた。

「お断りします」

歩き出そうとした。

「待って」

女は呼び止めた。

「わたし、あなたのことはよく知ってるのよ。成和学園高校の  
三年生。受験生よね。家には妹さんが一人」

「あなた、何者なんだ？」

思わず声を荒げた。

「乗ってよ。話すわ。誘拐が心配な年じゃないでしょう？ そ  
んな恐れはないって保証するわ」

話を聞くだけなら……。

涼は、車の助手席の扉を開けた。

「ありがとう」

助手席に座ると女が言った。

うっすらと薔薇のような香りがした。

「シートベルトして」

女に言われて、あわてて装着する。

「出すわよ」

車は発進した。

「近くの公園の駐車場へ行きましょう。そこでなら、落ち着いて話せるから」

「あなた、何者なんだ？」

「わたし、城崎<sup>しろさき</sup>。城崎文<sup>ふみ</sup>」

父宛にメール便を送ってきた女だ。

やっぱり、父の言っていたことと関係あるのか？

「わたし、昔はあなたのお父さんの部下だったのよ」

涼はどう答えるべきかわからず黙った。

車は商店街を抜けた。

城崎文は、白いブラウスに黒いスーツとスカート姿だった。

年齢は、若いようでもあり年を取っているようでもあり、不詳だった。昔、父の部下だったということは、それなりの年なのかもしれない。体格はほっそりしているが、立てばプロポーシオンはいいように思えた。化粧は濃い目で黒いロングヘア。髪はまっすぐだった。

「あなた、うちの父宛にメール便をおくったでしょう？」

不意に、気になっていたことが口をついて出た。

「そうよ」

「どんな内容だったんですか？」

「お父さんから聞いてない？ まあ、話せなくても無理はないか」

車は、近くの公園の駐車場へ入った。

他には一台しか駐車していなかった。

「さて、これでゆっくり話せるわね。シートベルト、はずしていいわよ」

そう言う文は、さつさと自分のシートベルトをはずした。

涼もならった。

涼は、心にも一抹の不安を感じた。

この、見知らぬ女が、どんなことを口にするのか、恐ろしくもあつた。

しかし、好奇心はそれに勝った。

「何から話せばいいかしらねえ。あなたと会って話したかったことはたくさんあるはずだけど、いざ、目の前にしてみると何から話していいのか」

「父とは、どうゆう関係だったんですか？」

「さつきも言ったように、わたしはお父さんの部下だったの」「研究所に勤めていた頃ですか？」



「そうよ。中央大学生物学研究所よ。お父さんの研究室で働いていたの。お父さんの研究テーマは、人間の潜在能力と遺伝子の関係。わたしはわたしで個人的なテーマを持っていたわ。それは人間の性衝動の遺伝的解析。あの頃は、わたしもあなたのお父さんも若くて意気込みに溢れていたわ」

そう言うと、文は遠くを見るようなまなざしになった。

「あなたのお父さんの研究はかなり進んでいた。わたしの研究もね。ヒトの遺伝子、つまりゲノムが解析されたっていう話は聞いたことあるわよね」

「はい。生物の時間に」

「わたしたちの研究は、基本的にはあの解析の後に続く研究だったの。ただ、ゲノム解析のニュースばかりが派手に取り上げられて、わたしたちの研究には注目は集まらなかったわ」

涼は、初めて、おそらく生れて初めて、父が昔やっていた研究がどんなものであるかを知った。それは、新鮮な驚きだった。

「あなたの父さんは将来を嘱望された研究者だったわ。そのまま行けば、研究所長も夢ではなかったと当時の仲間たちは言っていたわ」

何か、あったのか？

「ただね、あなたのお父さんは、研究のことになる途に突っ走るところがあつてね。あるとき、研究室にこっそり外部からヒトの卵子を持ち込んだのよ。そして、誰もいない夜中に、

実験用の器具を使って、自分の精子と人工的に受精させて、さらにその上に受精卵の遺伝子を改造したのよ。そして、こっそりその受精卵を卵子の提供者の胎内に戻した。

すべては、お父さんが自分で考えた仮説を実証するためだった。

お父さんの仮説では、特定の遺伝子が発現すると人間の潜在能力は百パーセント近く発揮される。いわば、超人ができる」

「その、改造された受精卵が超人？」

「残念ながらそうじゃなかったの。人工授精では不十分にしか発現しないことが、あとになってわかったわ。でも、その時作った受精卵は男性だった。もう一つ、同様の操作を施した女性の受精卵を作り、それぞれ成長してから交尾させれば、生れてくる子に、その、超人の特質が発現する。それが、結論だった」

涼は、聞くのが重苦しかった。

これが、自分とどう関係するんだ？

「わたしはね、お父さんの第一助手だったから、お父さんが勝手な実験をしていると気づいていたわ。このことが公になれば、倫理的にも、法的にも、お父さんは窮地に立つわ。だから、わたしはお父さんと話し合った。このことを黙っている代わりに、わたしも実験の仲間に加えてくれて。わたしもやりたかった実験があつたの。それをお父さんが遺伝子改造を行うときに、いっしょにやらせてもらったの」

「どういう、改造だったんですか？」

「攻撃性と性衝動を結びつける遺伝子改造よ」

「どうということだ？」

「その改造を受けた人間は、他者、この場合は異性に対する攻撃性と性衝動を同時に感じるはずよ」

涼はその言葉が何を意味しているのかよくわからなかった。

「ピンと来ないって顔してるわね。今はわからなくてもいいわ」  
でも、父が自分の精子を使ったって言っていたが……。

「どうということなんですか？」

「あなたの想像している通りよ。葛城涼くん。あなたこそ、お父さんとわたしの行った遺伝子改造の結果生み出された子なのよ」

遺伝子の……改造……。

涼はそれが、自分自身の話としてピンと来なかった。

「卵子を提供したのは？」

「あなたのお母さんよ。当時は、あなたのお父さんと婚約している仲だった」

「ということは、遺伝的にはぼくの両親は、やはり親には違いないということですよ」

「そうよ。それは間違いないわ。でもね、涼くん。あなたは、普通の人とは違うのよ。人間を越えた人間——超人の父親になるべく生れついた人なのよ。それが、あなたの運命なのよ」

運命……。

いきなりそんなことを言われたって……。

「あなた、異性に興味はない？」

涼は答に困った。

「人並みに、ありますけど……」

「だったらいいわ。あなたは、これから、多くの女の人と知り合い、交わることになるでしょう。そのとき、相手が苦痛を覚える行為に性衝動を感じるはずよ。それは、異常でも何でもない。あなたの遺伝子がそうさせているのよ。そうして、あなたはあなたと、同じような遺伝子改造を施された女性を探すのよ。その人と子供をもうけるために」

「ちよつと待って下さい」

涼はたまらずに遮った。

「いきなり、ぼくの運命を告げられても困るんですけど」

文は一瞬黙って、にっこり笑った。

「確かにそうね。ごめんなさい」

「その、同じように遺伝子を改造された女の人って、やっぱり、攻撃性と性衝動が結びついているんですか？」

「その女性はちよつと違うわ。被攻撃性と性衝動が結びついているの」

「被攻撃性？」

「つまり、その人は、苦痛を受けることに性衝動を感じるのよ」

「その女の人の遺伝子改造も、父と城崎さんがやったんですか？」

不意に城崎文は口をつぐんだ。

「これ以上は、今は言えないわ」

間を置いてから答が返ってきた。

「ただね、あなたには、話をすべて聞いて欲しい。だから、また会ってくれるわね？」

涼は答えなかった。

答えることができなかった。

いきなり告げられた、自分の出生についての秘密。

そのことをどう受けとめていいか、まったくわからなかった。

「一っだけ教えて下さい」

「なに？」

「由香は、妹は、やはり遺伝子を改造されているんですか？」

文は首を横にふった。

「ちがうわ。あなたの妹さんは、正真正銘、お父さんとお母さんの受精だけによって生れた子よ。遺伝子改造が施されたのはあなただけ」

そうか。

同じきようだいで妹はずいぶん性格が違うなと感じることがあったが、自分だけが遺伝子的に違うせいなのかもしれない……。

「今日は、これぐらいにしましょう。送るわ」

涼は、シートベルトを装着した。

文もシートベルトをすると、車を発進させた。

陽は、もう暮れようとしていた。

車の窓の外には、いつもの町の風景が見えていたが、もういつもの見慣れた風景として見ることはできないのだろうと思っ

## 5

城崎文と別れるときに、携帯電話の番号を交換した。

「あなたとは、長い付き合いになると思うわ」

そう言うと文は、番号が書かれたメモを渡した。

「よかつたら、あなたのも聞かせて」

文は自分の携帯を出しながら催促した。

今日、会ったばかりの大人に携帯の番号を教えることに不安がないわけではなかったが、結局教えた。心のどこかで、話の続きを聞きたいと思っていたからだろう。

文は、自分の携帯に涼の番号を打ち込むと、にっこり笑った。

「ありがとう。わたし、ずっとあなたのそばにいるわ。何かあったときには、いつでも電話して」

そう言うって別れた。

涼は、自分の人生に侵入してきたこの女性とどう関わることになるのか。不安と同時に妙な期待感もあった。

文と話してから、三日後、金曜日だった。

明日は休日なので、クラスの雰囲気もはなやいでいた。

昼の休み時間、涼がトイレの帰りに自分の教室の前に来たときだった。

教室の後ろの扉の前で、水島由紀が立って何かしていた。

よく見ると、携帯電話を開いていた。

校内での携帯の使用は禁じられている。それなのになぜ。

涼は疑問に思った。

由紀はすぐに携帯を閉じると、制服のポケットにしまい、ポケットに手を当てて、教室に戻った。

涼も教室に入った。

午後、涼は気にするでもなく、由紀のことを注視していた。

由紀は、その日の午後、やけにそわそわしていた。

何か気になっていることがありそうなのは、傍で見ているとよくわかった。

午後の英語の時間、小テストがあった。

涼は七割ほどの正解が得られた。

回答の後、小テストは教師のもとに回収され、教師はそれが

ポリシーなのか、最高点の者と最低点の者の名前を発表した。

由紀は最低点を取った二名のうちの一人だった。

由紀は英語が得意なはずだった。

こつこつ勉強するタイプの由紀は、クラスでは目立たないが、実力のある生徒だと教師も生徒たちも認めていた。

「これからは、もつとがんばるように」

教師はそう言うって授業を終えた。

何かある。

涼は確信していた。

もしかすると、久米島からのメールが携帯に入ったのかもしれない。

その内容が気になって、校則を犯して内容を見た。そして、

気もそぞろになってテストに集中できなかった。

何のメールだったのだろう？

もしかして、また、デートの誘い？

涼は、思いが千々に乱れ始めるのを感じた。

由紀は、また久米島と会うのか？

また、ラブホに行くのか？

行って、いったい何をするんだ？

自分が、由紀と付き合っているわけでも何でもないのに、激しい嫉妬めいた思いが自分を苛んだ。

おかげで、六限目の古典の時間は、授業でどんな内容を教え

られているのか、まったく頭に入らなかった。

授業は終り、帰りのホームルーム。

由紀は、見るからにうれしそうに明るい表情をしていた。

やはり、今日、これからデートなんだ。

涼は結論づけた。

ホームルームは終り、クラスメイトたちは三々五々、散っていく。

由紀は、逃げるように、小走りで教室を出た。

涼も後を追った。

追わずにはいられなかった。

生徒玄関から出た、由紀の後姿を懸命に眼で追った。

距離をおいて後をつける。

由紀は地下鉄の駅の方へ歩いて行く。大きなスポーツ・バッグを提げていた。

いつものように、地下鉄に乗るのか？

由紀は、地下鉄南北線の北十八条駅の入り口に消えた。

涼は足を速めて、自分も地下鉄の入り口に入る。あたりは、成和学園の生徒たちが多かった。

階段を降りたとき、由紀は、地下鉄の改札口をくぐろうとしていた。涼もあわてて定期券を取り出し、改札をくぐる。

すると、すぐに地下鉄の電車が来た。

よかった。もう少しで乗り遅れるところだった。

由紀を見失わなかったことに安堵した。

由紀は空いている席がるのに座ろうとせず、車両の扉のそばに立っていた。

由紀の目的地はやはり、ホテル・ベータ・インのようだった。

大通駅で降りた由紀は、この前と同じルートで、地下街をすすきの駅に向かった。

制服姿で、ラブホに入るつもりなのか？

後をつけながら、涼は、驚いていた。

由紀は不意に、すすきの駅に行く途中の公衆トイレに入った。

涼は立ち止まり、地下街の端の方の店に入ろうかどうかどうしようか考えているふりをした。

五分も経つただろうか。

由紀が出てきた。

薄い、くすんだ青いトレーナーとブルージーンズ姿だった。

提げていたスポーツ・バッグの中に着替えが入っていたのだろう。

やはり、制服姿では無理だろう。

涼は妙に納得した。

これから、どうするか？

由紀の後姿を目で追いながら、考えた。

自分は由紀とはちがって、ラブホに一人で入る自信がなかつ

た。

ふと、思いついたことがあった。

自分の鞆から携帯電話を取り出す。そして、いっしょにしまつてあつたメモも、番号をブッシュする。

由紀の姿は階段に消えた。

呼び出し音。

そして、

「もしもし」

「城崎さんですか？」

「葛城涼くんね、どうしたの？」

涼は一瞬ためらつた後、話し始めた。

城崎文は、驚くほど早く駆けつけた。

例の赤い軽自動車だった。

「だから、言つたでしょ。いつでも、あなたのそばにいるつて。で、頼みつて何なの？」

「知り合いの子がラブホテルに入ろうとしているんです」

「それで？」

「その子がどんなことをしているのか知りたいんです。だから、いっしょにそのホテルに入って欲しいんです」

「その子のこと、好きなのね？」

「いや……それは……」

「いいわ。わかつた。付き合うわ。ホテルの場所はわかる？」  
文の行動は早かつた。

車はすすきのを抜けて、ホテル街に入った。

ベータ・インは変わらぬたたずまいを見せていた。

「このホテル、地下に駐車場があるのね。入るわよ」

ホテルの出入り口の横にある、地下への通路に車を入れる。

地下駐車場はがらんとした寒々とした印象を与えた。

「さあ、行つてみる？」

彼女の入つた隣の部屋が空いてればいんだけど」

文に誘われたとき、涼は肝心なことがわからないのに気づいた。

「彼女がどの部屋に入ったかわからない……」

文は眉を曇らせた。

「それは困つたわね。ねえ、彼女の相手つて、もう来ているの？」

「まだだと思えます。ぼくらの学校の、先生ですから」

「それは、深刻ね。でも、いいわ。相手の先生がこれから来るのなら可能性はあるわ。その先生、車で来るの？」

「はい。たぶん」

「先生の車、見ればわかる？」

「はい」

「オーケー。なら大丈夫だわ。駐車場の入り口が見えやすい位置に車の場所を変えるわ」

そう言うと文は、車を駐車場の入り口のそばに変えた。

「あなたは、入り口をよく見てて。先生の車が来たら教えてちようだい」

「わかりました」

それから、二人はしばらく待った。

待つ間、涼は文に、由紀の一件を話した。

「それは、ほんとうに深刻ねえ。でも、あなたは、その由紀つて子に惚れてるわね」

「……」

涼は言下に否定できなかった。

午後五時三十分頃だった。

一台の車が入ってきた。

黒い軽自動車だった。

「あれです」

運転しているのはまちがいなく久米島だった。

「わかった。あなたは隠れてて」

涼は身をひそめた。

久米島は駐車場の一角に車を停めると、降りてホテルの入り口の方へ向かった。

「わたし、調べてくるわ」

そういう残すと、文も車を降りた。そして、久米島の後を追ってホテルの入り口の方へ消えた。

文はどうするつもりなのだろう？

涼は待った。

じりじりしながら待った。

十分ほどしたとき、文は戻ってきた。

「彼女たちの部屋がわかったわ」

その手際に涼は少なからず驚いた。

「どうやって？」

「あの先生の後をつけて、エレベーターに乗るのを見てたのよ。エレベーターの行き先階の表示から、三階に行くとわかったわ。で、わたしも三階に行ってみたの。この手のホテルはね、客が入っている部屋かそうでない部屋か廊下に表示されているのよ。それを見て回って、三階は使われている部屋は一つだけだったわ」

「……」

涼は一瞬、どうしていいのかわからなかった。由紀は間違いなく久米島といっしょだろう。それを追い詰めたとして、どうなるのだ……。

「どうしたの？ 行くわよ」

「はい」

行くしかない。ここまで来たら。

「制服の上着を脱いで」

涼はジャケットを脱いだ。

「ネクタイもはずして」

おずおずとネクタイも取る。

「いいわ、それで。わたしといっしょなら、中年女とその若い恋人に見えなくもないわ」

ラブホに入る……。

そのこの意味が、実感として伝わってきた。

二人は車を降りて、ホテルの入り口に入った。正面に案内板があり各部屋の写真が表示されていた。暗くなっているところもあったが、それは使用中ということなのだろう。

文の言ったとおり、三階の部屋は三〇五号室だけがふさがっており、あとは空いていた。文は隣の三〇六号室の上にあるボタンを押した。そして、フロントの方に行く。涼も遅れまいとあわててあとについて行った。

「三〇六、おねがいします」

フロントにいた眼鏡をかけた中年の女性はにこやかに鍵を出し、「七千六百元です」

と言った。

ラブホの相場を知らない涼は、意外に安いと感じた。

文はルイ・ヴィトンの財布を出し、支払いを済ませた。

涼は、あとでお金を払わなくちゃな。と妙なことが気になった。

フロントの脇にエレベーターがあった。さらに奥には『喫茶』

と書かれたガラス戸があった。二人エレベーターに乗り、三階で降りた。たしかに、文の言ったとおり、各部屋の扉の上に、表示板があり、三〇五は暗くなっていたが、三〇六は点滅していた。

二人は三〇六に入った。

殺風景な部屋だった。

大きなダブルベッドが部屋の三分の二を占めていた。ベッドの四隅の支柱には鎖が取り付けられており先端には短いベルトがついていた。

「やっぱりね」

文は得心したようにうなずいた。

「何がですか？」

「ここは、SMホテルね」

「SMホテル？」

「SMプレイを楽しむ目的で入るホテルよ。もちろん、ふつうのセックスをしてもかまわないんだけど」

そんなホテルで、由紀は何をやっているんだ？

「じゃあ、隣のようすを探ってみましょう」

そう言う文は、部屋の入り口のそばにある小さな冷蔵庫に近づいた。冷蔵庫は扉の一部が透明で中身が見えるようになっており、ビールやジュースが並んでいるのがわかった。冷蔵庫の上には、二人分のコップが衛生のための紙にくるまれてトレ



イの上に置かれていた。文は二つのコップを取り上げると、一つを涼にわたした。

何をするんだらう？

質問しようとしたとき、文はコップの包装を解いた。そして、入り口から見て左手の壁にコップを押しつけ、コップの底に耳を当てた。

「こうするのよ。けっこう隣の部屋の音が聞こえるわよ」

涼もあわてて包装を解いて、コップを壁に押し当てた。

聞こえた。

最初はかすかだだったが、耳が慣れるとはっきりとした音として耳に入ってくるようになった。

はじめに耳に飛び込んできたのは、悲鳴だった。

『あああん。あああん……』

あきらかに由紀の声だった。

かなり激しく、声を上げているようだった。

『どうだ、気持ちいいか？』

こんどは男の声。久米島だった。

『きもち……いいです……』

うわずったような、かん高い声。

『もっと、いじめて欲しいか？』

『はい。もっともっと、いじめて下さい』

『よし』

そして、また。

『ああああああん。あああん……』

二人が何をやっているのかは、涼でもわかった。

これが、SMBプレイというもののだろう。つまり、由紀と久米島はそういう関係だということだった。

だが、同時に涼は、自分が勃起していることに気づいた。

俺自身が、欲情しているのか……。

たしかに、由紀が、どんな姿で、どんな格好で責めさいなまれているのか、知りたいという思いはあった。

だが……。

涼は、壁に押しつけていたコップをはずしずと手に取った。

もうたくさんだった。

由紀と久米島が恋人同士だろうという予想はついていたが、

かくも露骨な関係だったとは……。

そう思うと、肉体は急速に萎えた。

文も、コップを手にとって、〈盗聴〉を中断した。涼の方を見て、どう声をかけるべきか考えあぐねているようだった。

「城崎さん」

声を発したのは、涼の方だった。

「なに？」

「もう、いいです。どうもありがとうございます」

「もういいって……」

「もう、わかったからいいんです。帰りましょう」

「せっかく入ったのに、ちよつともつたないけど、いいわ。じゃ、出ましよう」

文は室内の電話を取って、フロントに連絡した。

「すいません。急に都合が悪くなっちゃって。これから出ます」

二人はフロントに鍵を返して、ホテルを出、駐車場に戻った。

「涼くん」

運転席について、シートベルトを締めると、文は涼の方を見た。

「はい」

「あなた、やっぱり、さつきの子に惚れてみたいね」

「……」

「いいのよ。でもね、一言言っておくと、どんな女の子もいわゆる清纯派じゃないわ。どんな真面目そうな子でも、人には言えない秘密を持っているものよ。あの子の場合、それがたまたま先生とのSMプレイだったということね」

そう。ただそれだけのことなのかもしれない。

「ところで、あなた、さつき隣の部屋の声を聞きながら、感じていたんじゃない？」

涼は一瞬、どきつとした。

「凶星だったみたいね。でも、いいわ。それでこそ、わたしたちが作り上げた遺伝子をもつ男の子だわ。それよ。それこそが、

攻撃性に性衝動を覚えるということよ。あなたは、攻撃性と伴わないと性衝動を感じなくなっていくはずだわ。それは、追い追いかけていくはずだわ」

文の言葉はそれきりだった。

家のそばまで送ってくれる間、文はもう何も言わなかった。

## 6

城崎文が、車の中で何を言っていたのか、涼の印象には残らなかった。

そんなことよりも、由紀と久米島のが気にかかった。

あれから二人は、行為をエスカレートさせ、行くところまで行ってしまったのだろうか？

おそらく、そうだろう。

由紀。

あんなふうには声を上げるほど、嬉しいことをしてもらっているのか……。

ふと、涼は、自分が由紀のことを恋人か何かのように独占するのが当たり前だと思っている自分に気づいた。

そして、自分とではなく久米島と淫らな行為したのだから許せない。

ちがう。

本来許せないのは、久米島だ。

第一、現職の教師が、教え子とSMPプレイに耽るなど、許されることじゃない。

だが、涼は、このことを学校やPTAに訴える気持ちはなかった。

そんなことをしたら、由紀が傷つくだろうと思った。

夜、ベッドの中で、自分はこうすべきか、煩悶はんもんを続けていた。

結論が出たのは、三日ほどあとのことだった。

学校帰りに、ホームセンターに行った。

刃物のコーナーをていねいに見て回った。

そして、適当な刃渡りの果物ナイフを買った。

さらに、銀行のキャッシュコーナーにも寄った。

あるだけの貯金をすべて引き出した。そして、金をふだん使う財布に収めた。

家に帰って、ふだん使わない折りたたみのバッグを取り出して、いつも使っている鞆たもとに入れた。

これで準備はできた。

次の日から行動に移った。

数学の時間、久米島のようにそれをそれとなく観察した。

あいかわらず、久米島は教えるのがうまかった。冷静に、そ

してときに冗談を交えて、久米島は受験によく出る問題を解説していた。いつもと、変わりはなかった。

由紀は、無表情に授業を受けているようだった。

今日は何もないのか……。

まあ、見張り続けていよう。

涼はそう思った。

その日の放課後、涼は職員室へ行った。数学のノートを持ってだった。

「久米島先生。すいません」

涼は久米島の席に近づいて話しかけた。

「なんだい？」

久米島はいつものように、甘いマスクでにこやかに答えた。

「今日、受けた授業でちよつとわからないところがあるんですけど」

「いいよ」

涼は久米島の机にノートを広げた。

今日の授業で取り上げられた受験によく出る問題の解き方についての質問だった。久米島は要領よく答えた。涼はさらに食

い下がって、基礎的なこともたずねた。

そのときだった。

久米島は腕時計を見ると、すまなそうな表情で言った。

「葛城。申し訳ないが、先生、今日は用事があるんだ。また明

日にもゆつくり教えるよ」

何かある。

涼は直感した。

また、ラブホに行くつもりなのか？

「わかりました。ありがとうございます」

一礼すると、ノートを持って職員室を出た。

こんなに早くチャンスが来るとは。

涼は思った。

教室に戻ると、急いで身支度した。

由紀はもう帰ったようだった。

久米島は由紀と会うのだろうか？

だが、それはどうでもいいことだった。

涼は学校を出た。

地下鉄に乗って、すすきの駅で降りる。

地下鉄駅の構内を歩きながら、城崎文に連絡を取るべきかどうか迷った。

彼女がいたほうが心強いのは確かだった。

だが、これからやろうとしていることは、涼自身の問題であって、文には関係がなかった。

駅のトイレに入り、個室の中で折りたたみみのバッグを出して広げた。そして、制服の上着をたたんでバッグに入れる。ネク

タイもはずしてやはり、バッグに入れた。

オーケー。

これで、ラブホにも入れる。

多くなった荷物を抱えながら、涼はトイレを出てすすきの駅の出口から出た。

制服を脱いで歩いていると、なんだか、自分がこの歓楽街の一部分になったような気がした。

例の角を曲がり、ラブホテル街に入る。

ここまで来て、涼は自分の思惑に穴があることに思い至った。

久米島は、おそらくまだ来ていないだろう。たぶん、久米島が入るのはこの前と同じ部屋ではないかと思うが、そのことを確かめなくては涼自身がどの部屋にはいいのかわからない。とりあえず、久米島を待たなくてはならないが、どこでどのように待てばいいのか。

ふと、涼は、ホテルのエレベーターの奥に喫茶があったことを思い出した。

喫茶と言うくらいだから、喫茶店に違いないだろう。あそこで待てばいい。

次の行動が決まると、元気が出てきた。

涼はベータ・インの前に立った。

まず、念のために地下駐車場を見ておこう。そう思って、駐車場の入り口から入った。地下はがらんとして、車が一台停まっているきりだった。久米島ではなかった。地上へ戻って、

ホテルの入り口から入った。部屋はほぼ全部空いていた。フロントの前を素通りしようとしたとき、

「あの、何か？」

フロントの女性が声をかけてきた。

涼が若すぎて不審に思われたのかもしれない。涼は

この前とはちがう女性だった。

涼はできるだけだけにつこりと笑った。

「待ち合わせなんで、喫茶で待ちたいと思ひまして……」

女性もにつこり笑った。

「わかりました」

涼は喫茶の扉を開いた。

強い、煙草の匂いが鼻をついた。そして、ほのかなコーヒーの香り。

暗い感じの喫茶店だった。

涼は今入ったガラス戸を通して、エレベーターが見える位置の席に腰を下ろした。

「いらっしやいませ」

白いワイシャツに緑のエプロンをした中年の男が注文を取りに来た。喫茶はこの男が一人で切り盛りしているらしかった。

「コーヒー、下さい」

涼はおずおずと言った。

「はい」

男はさがった。

涼は、それからコーヒーを飲みながらしばらく待った。

涼は決意していた。

久米島を殺そうと思っていた。

そのために、買ったナイフも持ってきていた。

この三日間考えて、自分自身が、それほどまでに由紀のことを思いつめていることを初めて自覚した。だからこそ、由紀と

あんな関係にある久米島を許しておけなかった。

久米島を殺した後、どうするかまでは考えていなかった。

家を出て逃げるのか、それとも素直に自首するのか。そんな

ことはどうでもよかった。

問題は、いつやるかだ……。

由紀とこのホテルに入るなら、由紀の目の前で殺すというのがまず考えられた。しかし、それは、あまりにも由紀が受けるショックが大きい。しかし、やるのなら、それしかないのではないか。

結論は出ず、とりあえず、成り行きに任せる以外なさそうだった。

不意に、エレベーターの方へ人影が見えた。

目を凝らす。

長身の男女。

男は久米島だった。

女は……。

涼は言葉を失った。

女は冴木怜子だった。成和学園高校の音楽の教師だった。選択授業である芸術で、涼は美術を選択しているため、教えられたことはなかったが、指導がきびしいと評判の女教師だった。

久米島は、由紀だけではなく怜子とも関係を持っているのか？

涼は、久米島が怜子とどんなことをするつもりなのか、むくむくと好奇心が頭をもたげてくるのを感じた。

さっきまでの、思いつめた感情はどこかに行っていた。

二人はエレベーターに消えた。

涼はあわてて財布を出した。

「ごちそうさま」

コーヒー代を払うと、小走りにフロントの前を通り過ぎ、各部屋の使用状況がわかる案内板を見た。三〇五号室が使用中になっていた。さっき見たときには空室だった。

やっばり、三〇五か。

涼はためらわず、三〇六号室のスイッチを押した。そして、フロントに行く。

「三〇六号室、おねがいます。連れは後から来ます」

言われたとおり料金を払って、鍵を受け取った。こんなにすらすらと嘘をつける自分自身に少し驚いていた。

三〇六号室は、前と変わらず殺風景だった。

荷物を床に置くと、冷蔵庫の上からコップを取り、さつそくへ盗聴を始めた。

かすかに、ザーツと水の流れる音が聞こえてきた。

二人がシャワーを浴びているのだと思いつくまでに、しばらく時間がかかった。

そのまま、十分ほどその音を聞いていた。

やがて、音は止んだ。

しばらく耳をすませ続けると声が聞こえた。

「さあ、こつちへいらつしやい！ はやく！」

怜子の声らしかった。

「あなた、今日も、わたしを待たせたわね。いったい、どうゆうつもり？」

「申し訳ありません。早く片づくと思っていた仕事に手間取ってしまつて」

今度は、久米島の声だった。この前の由紀とのプレイとき比べて、情けないほど女々しかった。

「言い訳はいいわ。四つんばいになりなさい。早く！」

怜子の声は命令口調だった。そんな調子に慣れているようだった。怜子と久米島はこういうプレイを何度も重ねているのだろう。

「あなたみたいな役立たずは、お仕置きしてあげるわ。ほらっ」

そのとき、怜子は久米島を鞭か何かで叩いたようだった。

「ああっ」

久米島が声を上げる。

「ほらっ」

「あううう」

「ほらっ」

「ああっ」

二人が興奮してきているようなのは、口調からもうかがえた。

不意に心が冷めていくのが感じられた。

涼の心からは、久米島を殺そうという意図はとうに失せていた。

久米島は複数の女とSMプレイを楽しんでいる。あるときはSで、あるときはM。状況に応じて使い分けているのだろう。

由紀と怜子以外にも付き合っている女がいるのかもしれない。

そう思うと、久米島は涼にとって、殺すにも値しない、つまらない男だった。

コップを壁から離し、手に取った。

帰ろう。

自分の行動は何だったのか。

やりきれない思いだけがこみ上げてきた。

室内の電話の受話器を取る。

『フロントは0番』と書いてあった。

「はい」

「もしもし。急に都合が悪くなったんで、これから出ます」

涼は荷物を持って、ホテルを出た。

## 7

その夜は、なかなか寝付けなかった。

明日の朝、学校で由紀に会ったらどう接するべきか……。

今までと同じでいいんだ。

ただの、あまり親しくないクラスメイトとして接していけば

いい。

心の中で、そう囁いている自分がいた。

だが、一方で、

由紀は、久米島にだまされている。

お前が、由紀に好意を持っているのなら、このまま放置して

おいていいのか？

由紀に真実を告げるべきじゃないのか。

そのように言ってくる声も聞こえた。

涼は不確かな睡眠の中で、自分を持って余した。

しかし、いつか眠りに入っていた。

疲れているせいかな、眠りは思いのほか深く、翌朝はもう少しで寝過ぐすところだった。

いつもとかわらない、日常の朝が来た。

涼は、あわただしく顔を洗い、朝食を食べ、出かけた。

学校に近い地下鉄の駅では、成和学園高校の生徒たちで溢れかえっていた。

由紀の姿は見当たらなかった。

いつもとかわらず、学校へ行く。

教室の中もまた、いつもとかわらぬ喧騒だった。

涼が席について、五分くらいすると由紀も教室へ入ってきた。

やはり、いつもとかわらず、おずおずとクラスメイトと挨拶を交わして席につく。

いつもとかわらぬ一日がはじまった。

授業は、受験を念頭に置いた指導に重点が置かれるようになってきた。

涼の憂鬱な思いは、さらにいつそう重く、心にのしかかってくる。

昼休み。

生徒食堂で、カレーライスを食べながら、涼はぼんやりと物思いにふけっていた。

このまま、何事もなく過ぐして、由紀も俺も卒業していく。卒業してしまえば、自分、会うこともない。由紀と久米島の関係がどうなっていたのか、知る機会もなくなるだろう。

自分とは関係ないこととしてやり過ぐす。

それが、一番なんだろうな……。

ため息しか出てこなかった。

カレーライスは味がわからなかった。

ふと、聞いた声が耳に響いた。

次の瞬間、それが、由紀の声であることに気がついた。

見ると、食堂の出入り口から由紀が別のクラスの友人と話し

ながら入ってくる場所だった。

由紀は自分のクラスに友人が少ない。だから、休み時間などに他のクラスの友人と話しているのをよく見かけた。おそらく、由紀たちは他の場所で昼食をとり、おしゃべりをする場所を求めて食堂に来たのだろう。

二人は、自動販売機のコーナーでカフェラテを買い、涼から

少し離れた丸テーブルの席に腰を下ろした。

由紀は、よくしゃべり、よく笑った。

由紀の、こんな快活な表情は、教室では見たことがなかった。

そこには、無邪気な高校生の姿しかなかった。

二人のようすを見ているうちに、涼は心を決めた。

昼休みも残り少なくなり、涼はカレーの皿を食器の返却口に

戻した。



返した。そして、もとの席に座って、それとなく由紀のようすを見ていた。

由紀たちは、ひとしきり話も済み、食堂の時計を見て立ち上がった。

涼も立ち上がった。

食堂を出て行く二人の後についていく。

由紀の友人は自分の教室の前で手を振って別れた。由紀は一人で自分の教室の方へ向かった。

今だ。

涼は、由紀に近づいた。

「水島さん」

声をかけると、由紀はふり向いた。

「……」

「ちよつと、話があるんだけど、今日の放課後、いっしょに地下鉄の駅まで歩いてくれないかな？」

話していて、涼は、なんて間の悪い、かつこ悪い頼みかただろうと思った。それこそ、どこかのファミレスにでも誘えばよかったか。

「何の話？」

由紀は、あからさまに不審の目を向けていた。

無理もないな。

「それは、放課後話す。とにかく、大事な話なんだ」

由紀は一瞬黙ったが、思い直したように言葉を発した。

「わかったわ。学校に近くでいっしょにいると目立つから、少し離れたところで待ち合わせしましょう。それでいいでしょう？」

「ああ、いいよ」

二人は、生徒玄関のある校舎の正面ではなく、校舎の裏の通用品のそばで待ち合わせることにした。

午後の授業は、気もそぞろだった。

由紀と歩くときに何と話すべきか考えると、そのことで頭がいっぱいになってしまった。

時間は遅々として進まず、焦りに似た思いが涼をおそった。

素直に、思ったとおりに話そう。

涼は、そう心に決めた。

授業が終わり、帰りのホームルームが終わり、生徒たちは三々五々散っていった。

涼は、由紀の方を横目で見た。由紀はいつものように、そそくさと身支度を整えて、教室を出た。涼も後を追うように、教室を出る。

生徒玄関は混雑していた。

由紀は先に行ったようだった。

涼は玄関から外に飛び出し、小走りに裏の通用品の方へ向か

った。

校舎の裏は、生徒玄関の混雑が嘘のようだった。

こじんまりと存在する通用口の前で、由紀は待っていた。

「来てくれて、どうもありがとう」

思わず、そんな間抜けな言葉が口から出た。

「いいのよ。それより他の人に見られるといやだから、できるだけ遠回りして行きましょう」

「わかった」

二人は並んで歩き出した。

「話って、なに？」

涼は、発すべき言葉を探して、しばし黙り込んだ。

「俺、知ってるんだ」

「……何を？」

由紀は不審そうなまなざしを向けた。

「君と、久米島先生のこと……」

由紀は、歩みを止めた。

両目を見開いて、涼を凝視する。

「どうして、知ってるの？」

涼は、話し出した。

地下街で由紀を見かけて、後をつけ、ラブホに入るのを目撃したこと。その後にも、知り合いの女の人と由紀たちの隣の部屋に入って、聞き耳を立てたこと。

「よくないとは思ったんだけど、君のことが気になったんだ」

「……」

由紀は両の目をむいていた。

「でもね、水島さん。久米島先生はよした方がいいと思う」

「なぜ？」

「久米島先生は、君以外の人とも付き合っている」

「誰と？」

「音楽の、冴木先生だ。二人は、その……SMをする関係らしい」

由紀は目を伏せ、口元をかすかにゆがめて笑った。

涼には、その態度の意味がわからなかった。

「あなたって、本当に、最低ね」

涼はその場に凍りついた。

「人の後をつけて、こそこそ嗅ぎまわって。あたしに興味があるのなら、他に方法があるじゃない。それなのに、そんな卑劣なまねしかできないの？」

「……」

涼は、言葉が出なかった。

「そりゃ、あたしは久米島先生と付き合ってるわ。でも、それはあなたに関係ないでしょう。あたしはね、久米島先生が、あたし以外の人といひことしていても、かまわないわ。あたしと会っているとき、あたしにやさしくしてくれれば、それでいい

の」

やさしく？

由紀と久米島のやっている行為がやさしいものなのだろうか？

不意に、涼は、むらむらと。由紀を自分の思うとおりにしたいという欲望が湧き上がってくるのを感じた。

由紀が、久米島にされたようなことを、自分もして、由紀に同じような声を上げさせたかった。

それは、一種の逆ギレとでも言うべき感情だったかもしれないかった。

「あたし、あなたとは二度と口きかないわ。久米島先生とあたしのこと、他の人にしゃべったら、ただじゃすまないわよ」

ふだん、あまり口をきかない由紀の精一杯の恫喝は迫力があつた。

「……わかった」

「さよなら」

それだけ言うと、由紀は一人で歩き出した。

涼は、しばし、その場を動くことができなかった。

## 8

自分はいったい何を期待していたのだろう。

涼は、家へ帰る道すがら、そんな思いにさいなまれていた。自分の家のそばで、バスを降りて、道を歩き出したときだった。

赤い軽自動車か道のかたわらに停まった。

城崎文だった。

「乗らない？」

声をかけてきた。

このまま、家に帰るのも気が重かったので、車に乗った。

「いろいろあつたみたいね」

車を発進させると、文は言った。

「わかりますか？」

「あなたとは、最近出会ったばかりだけど、表情をよく見れば、それくらいのこととはわかるわ」

しかし、今の涼は自分の経験について口を開く気になれなかった。

「このあいだの彼女のことね？」

涼は黙った。

「いいわ、言いたくないのなら」

「城崎さん」

「なあに？」

「女の子って、自分以外の人と付き合っている相手とも愛し合えるものなんでしょうか？」

「いきなり、むずかしい質問ね」

文はかすかに笑った。

「でも、一口に女の子と言ってもさまざまだから、きっとそんな子もいると思うわ。自分と会っている間だけ恋人でいてくれればいいっていう子もね」

しばし、二人の間を沈黙が支配した。

車は、また、この前の公園の駐車場に向かった。

「城崎さん」

涼は車が停まってややしばらくしてから言った。

「なあに？」

「俺、城崎さんの言うとおりにしてみようと思います。城崎さん、俺は自分にふさわしい女の人と出会うため、多くの女の人と交わるって言ってましたけど、俺自身もそうしてみようという気になったんです」

「それは、よかったわ。それでこそ、あなたは生れてきた目的をまっとうできるのよ。あなた、受験生だけど、どの大学を志望するかはつきりと決まってるの？」

「いえ、まだです」

「だったら、ご両親に無理を言っても東京の大学を受けなさい。わたしも、実はふだんは東京に住んでるの。あなたが、受験に受かって東京に来てくれたら、あなたの東京での水先案内人を引き受けるわ」

東京か……。

修学旅行で通ったことはあるけれど、それだけだった。

「実を言うとね、あなたのお父さんに出したメール便にも、あなたのことをわたしにまかせてほしいって書いたのよ」

未知の大会で、一人で暮らすのも悪くない気がした。

「わかりました。やってみます」

この先自分、受験勉強に集中できれば、由紀とのことも忘れることができそうだった。